

# 野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

第 134 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成15年12月21日

メダイチドリとトウネン



2003. 9. 7 石狩浜 撮影者 佐伯武美

〒062-0933 札幌市豊平区平岸3条18丁目4-32-314



も く じ

鳥好きの文学散歩 3 清少納言「枕草子」	
高橋 良直 .....	2
私の探鳥地 (47) 利根別原生林 (岩見沢市)	
大荒田忠良 .....	3
「おっ鳥クラブ」と栗山の里山づくり	
中井 惶 .....	4
野鳥情報と新聞報道 -カササギを例として-	
樋口 孝城 .....	8
江別市にもカササギ飛来	
広 報 部 .....	10
鳥獣保護員制度について	
村井 公裕 .....	10
道内における「市町村の鳥」の指定状況について	
広 報 部 .....	11
探鳥会ほうこく .....	12
探鳥会あんない .....	15
鳥 民 だ よ り .....	16

鳥好きの文学散歩 3

清少納言「枕草子」

高橋 良直

「春は、曙。」で始まる有名な「枕草子」の第1段、秋に関しては次のように述べられている。

「秋は、夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。」

カラスや雁の群れがねぐらに急ぐ様を秋の代表的な風情としているのであるが、ここに平安朝の貴人の感性が現れているのだろう。雁の群れに風情を感じるのには理解できても、カラスが山に帰る様子に「あはれ」を感じるというのは、現代においてはいささか奇異な印象を受けるかもしれない。ここでは、カラスは少しも嫌われていないのである。しかし、考えてみればカラスが人間の排出する生ゴミを目当てに市街地に進出し、様々なトラブルを起こすようになったのは、歴史的にみればごく最近のことである。かつてカラスは神様のお使いと考えられていたそうだし、「枕草子」の時代（そしてその時代はカラスに関してはつい最近まで続く）カラスは人間との間に適度な距離をおいて生息していたことを示しているようである。

第41段（異本では39段）は鳥に関する章段で、清少納言が好ましく思っている鳥が列挙されている。主なものを挙げると、ほととぎす、くひな、しぎ、都鳥（ユリカモメ）、ひわ、ひたき、山鳥、鶴、たくみ鳥（ミソサザイ）、鴛鴦（オシドリ）、千鳥、鶯（ウグイス）などで、かなりの種類の鳥をご存じだったようである。

清少納言が最も好んだ鳥は何かというと、その答えはホトトギスである。ホトトギスについて第41段では「いつの間にか得意げに鳴く声が聞こえたかと思うと、卯の花や橘の枝に隠れてなかなか姿を見せないなど心憎いほど好ましい。ホトトギスの初音をどうかして人より先に聞こうと夜

中に目を覚まして待っていると、聞こえてくる声の愛らしさは、もう魂が震えるほどにすばらしく、どうにもたまらない。ウグイスが夏を過ぎてもしゃがれた声で鳴いているのと比べると、六月（旧暦）になってしまうと声も立てなくなるというのも、いくらほめても足りないくらいだ。」というような調子で褒めちぎっているのが、何事にも好き嫌いがはっきりしている清少納言らしくて、まことに面白いと思う。ホトトギスの初鳴きを人より先に聞こうとして夜中に起きだして待つというのは、いささかマニアックのようだが、現代のバードウォッチャーがウグイスやカッコウの初鳴きを心待ちにする心情に通じるように思われる。

また、第99段（異本では95段）には彼女がホトトギスの声を聞きに行こうと言い出し、車を仕立てて何人かで賀茂神社へ出かける話が出てくる（これなどは今日の探鳥会のはしりというものかもしれない）。さらに第226段（異本では212段）では、賀茂神社にお参りした際に聞いた田植えの女たちの歌が気に入らないとあって憤慨している。その歌というのが、「ほととぎす、おれ、かやつよ、おれ鳴きてこそ、我は田植うれ（ホトトギスよ、おのれ、こんちくしょうめ、お前が鳴くから、わたしゃ田植えをせにゃならぬ）」というような田植え歌で、格別ホトトギスを嫌う意味はないであろうに、ホトトギスに対して無礼だといって、ムキになっておられるのである。

残念ながら北海道ではなじみの薄いホトトギスだが、万葉集の中で最も多く詠われているのはこの鳥だそうであり、古くから風流を愛する人には尊ばれていたようである。

（鈴木日出男氏による現代語訳を参考にしました。）

〒006-0851 札幌市手稲区星置1条6丁目8-1

# 私の探鳥地 (47) 利根別原生林 (岩見沢市)

大荒田 忠 良

利根別原生林は岩見沢市街地に隣接する“原始の森”で、その面積はおよそ400ヘクタール、自然休養林、水源涵養保安林、鳥獣保護区などに指定されています。また40種以上の広葉樹の天然林や約200種の下層植物がひろがり、そんな豊かな植生のなかで、約30種以上の野鳥が繁殖しているといわれています。シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、エナガ、コゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、クマガラ、フクロウ、キビタキ、オオルリ、オシドリ、カルガモ等々。

春、フクジュソウ、ナニワズが咲きはじめると森の入口にひろがる大正池には次々と水鳥がやってきます。マガモ、カルガモ、オシドリ、カイツブリ、アオサギなど。ときにはイソシギ、カワアイサが姿を見せることもあります。大正池の奥の大沢の流れではミソサザイを見ることもできます。森がすこしづつすみどりいろに染まってき、エゾヤマザクラやコブシの花が色どりを添える頃、原生林は最も初々しい春の季節を迎えます。ミヤマスマレ、ミヤマエンレイソウなどが咲き乱れ、待ちに待ったキビタキ、オオルリがやってきます。アオジ、イカル、クロツグミなども姿を見せてくれます。

5月も後半に入ると、すみどりいろに明るかった森もだんだん木の葉が繁くなってき、初心者の私にはなかなか鳥の姿を確かめることができません。暫らくはランなどの

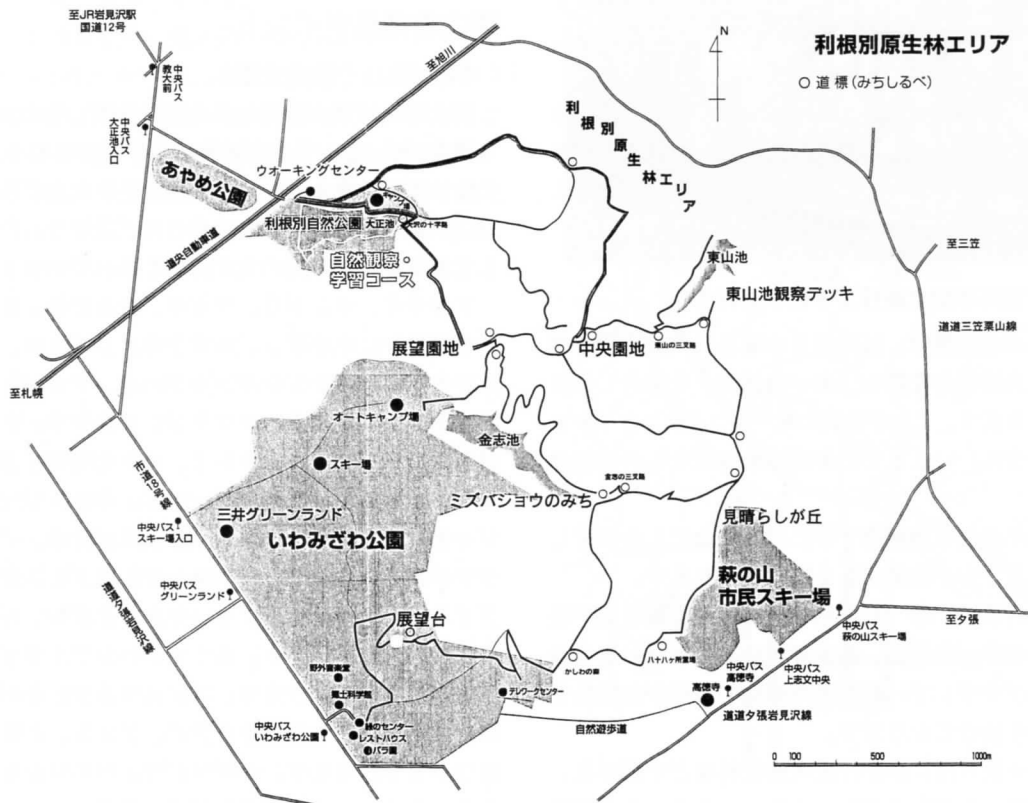
草花を中心に楽しむこととなります。ユウシュンランにはじまってコケイラン、サイハイラン、ノビネチドリなど10数種のランを見ることができます。

夏鳥が南へ飛びたち、森の木々の葉も落ち、やっと鳥の姿を見つけやすくなる頃、キレンジャクやアトリなどの冬鳥たちがやってきます。キバシリやエナガ、ヤマゲラ、クマガラ、フクロウなどの留鳥もじっくり観察することができます。バードウォッチングの季節到来です。

利根別の森が一面雪におおわれるとネズミ、エゾリス、ウサギ、キツネなど小動物の足跡があちこちに見られます。特にネズミの足跡のデザインは尾を曳くからでしょうか、なんとも美しいです。空を見上げるとトビが数羽、いつも旋回していますが、ときにはオジロワシ、オオワシが悠々と飛んでいることもあります。

原生林の中は散策路が縦横に交差し、どこを歩いても鳥たちに会える楽しい森です。それでも7年ほど前、大正池周辺の散策路建設が進められたとき、水鳥の繁殖が心配されたり、クマガラが営巣を放棄した、ということがありました。原生林入口周辺に芝が植えられ、かつての姿を変えてしまったのもこのときでした。利根別原生林が、“原始の森”としての誇りをもちつづけられるよう願っています。

〒068-0803 岩見沢市南町3条2丁目2-12



利根別原生林ウォーキングマップ (岩見沢市発行) を一部改変

## 「おっ鳥クラブ」と栗山の里山づくり

栗山町 おっ鳥クラブ事務局 中井 惺

御誌広報代表樋口さんから投稿の依頼をいただき軽い気持ちでお引き受けしましたが、最近号をいただき投稿されている方々の内容を見て安易にお引き受けしたことを悔やんでしまいました。皆さんは専門的に観察を続けられきちんと考察をまとめておられます。私たち「おっ鳥クラブ」は、栗山町と近隣の鳥好きが集まり四季折々の野鳥観察を楽しんでいるグループですが、こんな気楽で肩ひじ張らず活動を続けている仲間もいることと栗山の自然観察の仲間たちの活動を紹介させていただきます。

おっ鳥クラブ発足は1988年で今年は15周年を迎えました。会員数36名でとくに会則もありませんが15年毎年楽しく鳥を見ながら過ぎてしまいました。今年は15周年記念事業として浜中町霧多布、標茶町萱沼方面へ探鳥旅行に出かけました。16名の参加で・(点)のようなエトピリカ、林道でのヤマシギ、湿原とタンチョウ、ノゴマ、動物園でシロフクロウ、シマフクロウ、オオワシ、オジロワシ(これが探鳥と言えるか?)などを楽しみ懇親を深めて来ました。



15周年記念旅行エトピリカ村で

おっ鳥クラブの活動は、毎月第3水曜日に例会を開き探鳥会計画や野鳥情報を交換し「おっ鳥通信」を発行し会員へ配付しております。これが会員の唯一のコミュニケーションかもしれません。いままでの年間活動の主なものを紹介します。

1月には新年総会兼懇親会で中にはこの会にしか出席しない会員もおりますが結構楽しく盛り上がります。

1月から3月まで“冬”鳥を見る会を毎週土曜日の午後開催しております。会場は、御大師山のふもと「いきもの里ふれあいプラザ」で一般町民の参加で会員がお世話をしながら観察を続けております。

2月には苫小牧方面に出かけ北大研究林などで観察会。

3月には夕張川を賑わすガン・カモ・ハクチョウの探鳥

会を開催します。

4月は、いきもの里づくり推進協議会主催の御大師山合同観察会に参加し春の野鳥観察のリーダーを務めます。

5月の探鳥会は、鶴川方面でシギ・チドリと鹿沼小学校周辺で春の山野の鳥を観察します。毎年続けていますと鶴川河口が変化し干潟が減少しシギ・チドリが少なくなったことが気になっておりました。昨年鶴川の人達と交流を持ち漁港開発による潮流の変化で砂嘴が減少し砂嘴の復元と人工干潟の工事が進められていることを教えていただきました。また一泊探鳥旅行で去年は支笏湖国民休暇村へ出かけ夏鳥を楽しみました。

6月は夕張川河畔の草原鳥探鳥会、9月には室蘭市女測量山やマスイチの浜などへ出かけワシ・タカとハヤブサや渡りに集結する夏鳥を楽しみ、10月には地元御大師山で探鳥会、12月には小樽方面へ出かけ冬の高鳥と寿司を楽しみます。こんな活動をしなが栗山の自然に親しみ、野鳥、植物、昆虫など通じて自然の営みを学んでいます。私たちおっ鳥クラブには専門的な知識をもった者はおりませんのでシギ・チドリ、ワシタカの識別にあたっては観察した者の合議制で決定しておりますが最近では自信をもって判別する会員も増えて来ました。

### 栗山の探鳥ポイント

#### ○御大師山(栗山公園)

御大師山は栗山市街地の北側に位置し栗山公園の中にあり標高100m足らずの丘陵地ですが栗山町のランドマークになっているオオムラサキが発見されたところです。散策路は四国八十八ヶ所のお地藏さんが設置された山道を利用して古くから町の人々に親しまれています。

アオサギ、オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、トビ、オジロワシ、オオワシ、オオタカ、ハイタカ、ノスリ、チゴハヤブサ、オオジシギ、キジバト、アオバト、カッコウ、ツツドリ、フクロウ、クマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒバリ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ピンズイ、ヒヨドリ、モズ、キレンジャク、ヒレンジャク、ミソサザイ、コリリ、ルリビタキ、ノビタキ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ホオジロ、ミヤマホオジロ、アオジ、クロジ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ハギマシコ、ベニマシコ、ウソ、イカル、シメ、ニューナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ム

クドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラスなどが観察されます。交通はJR栗山駅から徒歩10分くらい、車利用の方は栗山公園駐車場が近くにあります。ファープルの森観察飼育舎、ふれあいプラザも公園内にありますのでお立ち寄り下さい。

○夕張川

栗山町と由仁町、長沼町の間を流れる夕張川とその支流及び周辺の水田にはガン、ハクチョウ、カモの仲間が3月下旬から4月いっぱい飛来します。夕張川本流も十分楽しめますが、水田地帯で採餌するマガン、ヒシクイ、ハクチョウの群れを観察するのもお勧めです。

カイツブリ、ウ(ウミウかカワウか不明)、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギ、アオサギ、マガン、ヒシクイ、オオハクチョウ、コハクチョウ、オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、シマアジ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カワセミ、ヤマセミ、イソシギ、アオアシシギなどの水鳥と、河畔の草原や河畔林ではコチドリ、シロチドリ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、アカゲラ、コアカゲラ、コゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、ツグミ、ウグイス、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ホオジロ、ホオアカ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、ムクドリ、コムクドリなどを楽しめます。

交通は、JR栗山駅から徒歩約15分くらいですが一番身近な観察場所は小林酒造の横の夕張川の流れます。カルチャープラザの案内でお聞き下さい。近道を教えてください。車利用の方は小林酒造記念館駐車場を利用されると便利です。お帰りには記念館を見学されると辛党さんのお土産が購入できます。また昼食はレストラン蔵がすぐ近くにいます。ただガン、ハクチョウは早朝食事にいますので川に残るものは少ないでしょう。

諸橋仁美さんの調査では、マガンの群れにはカリガネ、ハクガン、シジュウカラガン、サカツラガンが混じって見られることがあるそうです。

○不動の滝(御園)

不動の滝は、角田のR234と道々3(札幌夕張線)の交差点を円山方面に進み南学田を過ぎ案内看板に従い進んでください。河畔林に囲まれた滝ですが四阿もありゆっくり楽しむことができます。

アオサギ、トビ、オオタカ、ハイタカ、ノスリ、キジバト、アオバト、カッコウ、ツツドリ、フクロウ、ヤマセミ、アカショウビン、カワセミ、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス、コルリ、トラツ

グミ、アカハラ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、カケスなどゆっくりと楽しめるところです。

このほか栗山町では、栗山ダム湖周遊道路もお勧めします。パークゴルフをやられる方は探鳥の後いかがでしょうか。

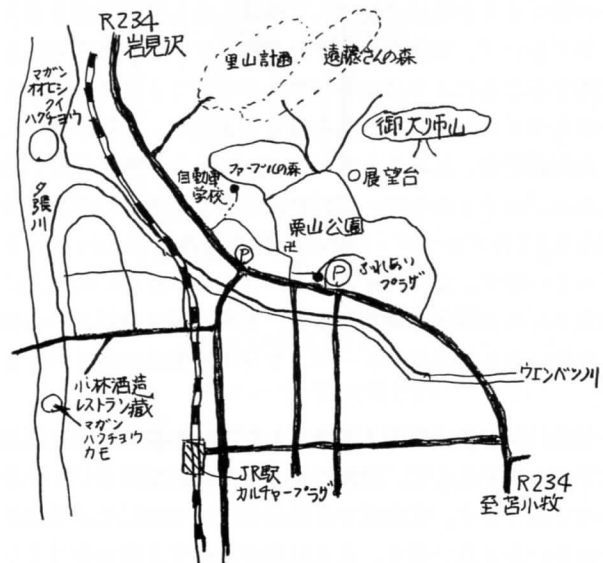
ヒシクイ(オオヒシクイ)の罫 夕張川

栗山町の母なる川夕張川にはハクチョウ、ガン、カモの仲間が3月下旬から4月いっぱいまで多数飛来します。

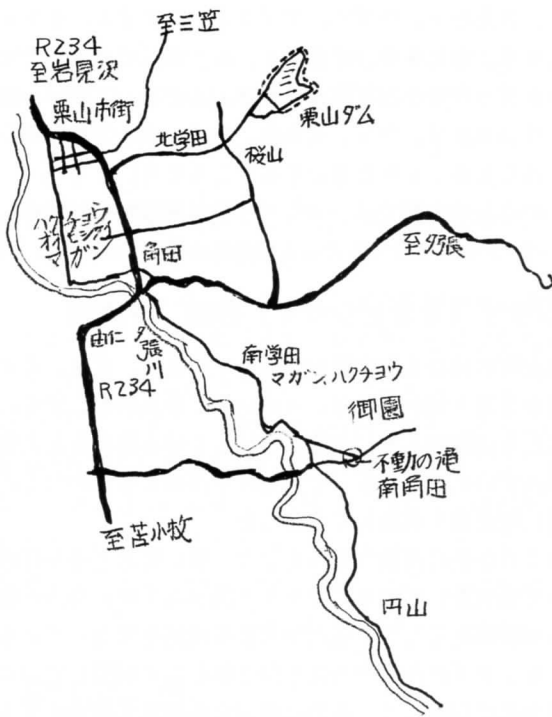
私たちは町の人々に夕張川の持っている豊かさと大切さを知っていただき、もっと親しみを深めてもらいたくこの時期に探鳥会を実施して来ました。

ところが会員諸橋仁美さんがガン類の渡来と渡り径路について調査しており、ウトナイ湖から美唄宮島沼へ移動する中継場所として夕張川が重要な役割を果たしていること、ヒシクイは夕張川の数カ所を罫として利用しており、河川を罫に利用しているのは全国でも極めて少なく貴重な場所であることを知りました。

夕張川を利用するマガンの数は30,000羽くらいで宮島沼に立ち寄るマガンの約半数近くが利用していることになりました。そこで今年から諸橋さんの調査のお手伝いをするようになりました。ところが早朝5時から7時まで罫と狙いを定めて会員を配置したもののあまり入っていなかったり、マガンが飛び立ったりして識別に苦勞をしたりで素人集団はたいへん苦勞しました。いままで諸橋さんが一人で調査を続けていた苦勞を改めて知りました。ただこんなきっかけからヒシクイやマガン、ハクチョウの採餌場所でのデータ収集に会員が深く関心を持つようになり、観察場所や羽数カウントなどを記録するようになり諸橋さんの調査の一助になればと頑張るようになり、おっ鳥クラブにとってはたいへんよい学習の場となっています。



御大師山・夕張川



不動の滝・栗山ダム湖

### 「ハサンベツ里山づくりのこと」

さて、栗山町の自然について触れてみます。栗山町にはおっ鳥クラブのほか、植物観察会、オオムラサキの会、御大師山を愛する会、ホタルの会、ウォーターリフォーム会、青年会議所などで構成する「いきものの里づくり推進協議会」があります。この協議会は今では栗山町のランドマークになっております国蝶オオムラサキが発見された御大師山が、平成元年環境庁から「ふるさといきものふれあいの里」に指定されました。その後、「ふれあいプラザ」、「ファープルの森」、「蝶の観察飼育舎」などの施設整備が進められました。その間オオムラサキの会が中心となりオオムラサキの食樹エゾエノキの里親活動で各団体が協力しエゾエノキの森づくりを町民運動として展開しました。平成6年3月各グループ、団体がそれぞれが持っている機能や知識を連携することにより栗山の自然を守り育てようと「いきものの里づくり推進協議会」を設立しました。共同事業として合同観察会、ふるさとカレンダーづくり、秋の栗拾い遠足とエゾエノキの冬囲い、活動報告書「いきものの里の仲間たち」(各グループ・団体の活動報告書)の発行などを行っています。また「ふるさといきものふれあいの里」に指定された西岡水源地を語る会、丸瀬布昆虫同好会との交流事業いきもの里フォーラムを毎年開催参加しております。

平成11年、栗山町が土地購入した20haの農業耕作放棄地をフィールドにした、里山づくりを町民参加の手づくりで進めております。北海道では里山をテーマにした事業は耳なれないかと思えます。人と自然が共存する環境をつくりたいと活動を進めております。里山づくりはいきものの里

づくり推進協議会の構成団体が推進役となり計画を進めて来ましたが、本格的な事業を進めるため平成13年7月ハサンベツ里山計画実行委員会を設立し、植物観察会飯塚修氏を実行委員長として進めております。

計画は20年計画で進めます。ハサンベツ地区は栗山市街地の北西に位置し御大師山と地続きの沢田が約20haであったところ。ここで農業を営んでいた方々が高齢化や、転出などで耕作できなくなり耕作が放棄された農地で、水田や畑であった土地も数年経つと柳などの樹木、ヨシやイタドリ、ヨモギなどの雑草に覆われてしまい惨憺たる状況になっていました。

この計画を進めるにあたっては、いきものの里づくり推進協議会が中心となり里山づくりに関する講演会・シンポジウム・フォーラムなどを広く住民の参加を呼び掛け開催して来ました。

### ○小川づくりのこと

里山づくりの第一歩は、小川をつくりウグイやドジョウが泳ぎ、ホタルやトンボが飛び交い子供が川遊びができるような環境づくりです。この地域を流れるハサンベツ川はたびたびの洪水対策で三面張りの工事がなされ、深くて子供どころか大人も入ったら簡単に上がれない、落差工も高く魚が登れない状態だったのです。建設会社の常務はじめ従業員の人達がボランティアでユンボ(大型掘削機械)で約2kmの小川づくりに取りかかりました。乱暴な話ですが構想はあっても設計図はありません。途中で右や左に曲げ、こころあたりに池を掘れ、湿原性植物復元用の湿地を作ろうと矢継ぎ早の注文にも快く応え作業を進めてくれました。いまではそれなりの小川になりドジョウやウグイ、エビも登りはじめましたし、上流部ではエゾサンショウウオの繁殖が見られるようになりました。そしてトンボもヒガシカワトンボ、ルリイトトンボ、ルリボシヤンマなど種類も数も増えて来ましたしホタルも増えて来ました。

### ○湿原性植物のこと

次に湿原帯にミズバショウ、エゾノリュウキンカなどの植物を増やそうと植物観察会が中心となって種子の採取から実生育苗、移植を進めております。大変な作業ですがこの道の専門家飯塚実行委員長のリードで着々と成果を上げております。また夕張川河川敷地で開発されるところの湿地植物を掘取り移植し貴重な植物の保存も試みております。さらに大学と協力し植物の水質浄化力の試験を実施しています。

### ○田んぼと畑づくりのこと

里山だから農業の真似事をということではじめたのが田んぼづくりです。もともと水田でしたが長年の転作休耕で水田の形は残っておりません。小さな田んぼを最初は2枚作りました。これでは日の字なのでもう2枚作りました。これでようやく田の字となりました。この田んぼは、小学校の体験学習に利用されております。畑では、社会教育で親子が体験農園に利用しております。実行委員会メンバー

でソバを蒔き収穫しました。来年は菜の花畑にしようと菜種を蒔きました。

○ビジターセンターづくりのこと

このような活動を進めるうちに拠点の施設が欲しいとビジターセンターづくりを構想しました。その資金を住民の募金で集めようと募金をはじめました。

ところがあつという間に200万円をこえる募金が集まりました。さらにセブンイレブンの緑の募金から100万円の補助金もいただくことになりました。合計300万円、これで建設会社にお願ひし、請け負った建設会社はもちろん、建て具を納品した会社も協力していただき格安に出来上がりました。その後続々と善意の協力者が現れ水道や格納庫などが整備されております。

○水車小屋づくりのこと

次には水車小屋をつくり水車の力を利用した何かをやろうと取り敢えず水車を作り沢水を引き、現在はただ単に回しているだけですが、回っている水車をはじめてみる人もおり結構人気です。

これから水車を利用して何かが始まります。

○里山の守神のこと

また栗山在住の木彫り作家中原篤さん、会田幹男さんからフクロウの作品が寄贈されビジターセンターの入り口と玄関に設置されました。

もちろん本物のフクロウもこの里山を餌取り場としています。

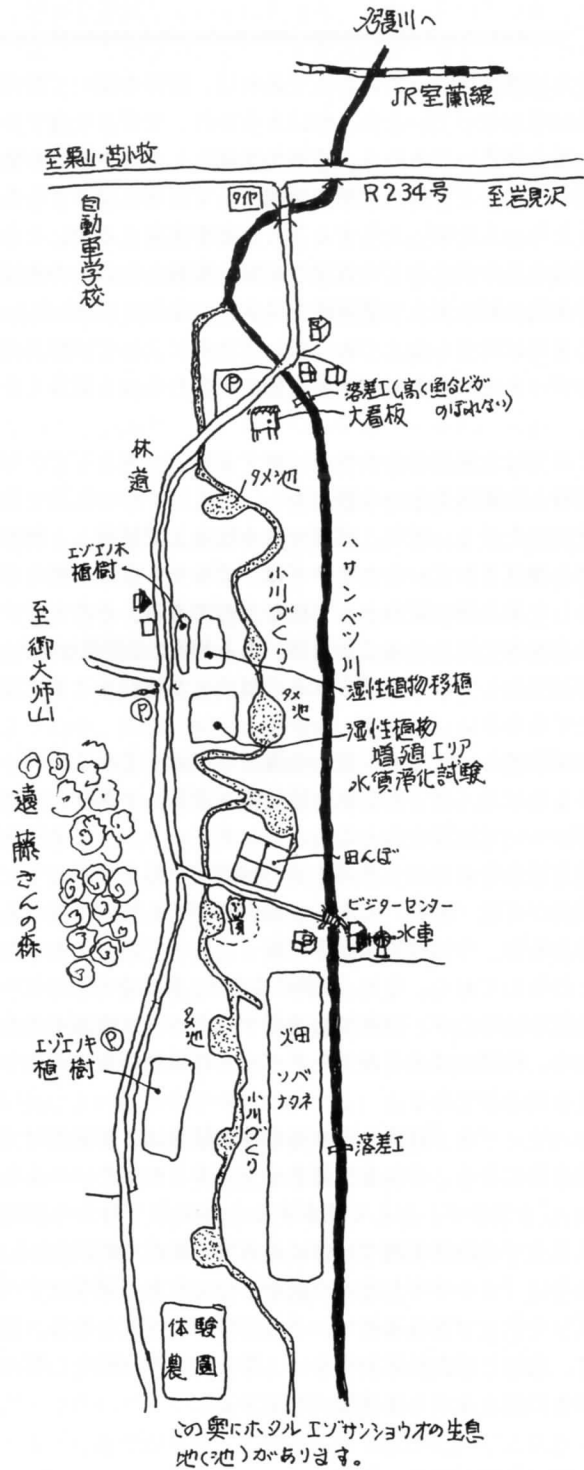
○遠藤さんの森のこと

このような活動を進めていることに賛同された遠藤桃子さんが里山計画を進めている地区に隣接する山林約50haを里山計画に役立ててくださいと町へ寄付されました。「里づくり」と「山づくり」がこれで一体となり「里山づくり」が名実共に進められることとなりました。この山は御大師山とハサンベツ地区との間にあり、広大な面積を持つことになりました。植物観察会が中心になり植物調査をはじめております。

○未来に夢をひろげます

里山計画は20年計画ということでスタートしましたが、これからが本番というところですよ。構想では里山博物館もあり、とくに湿地植物の育成増殖などは毎年継続的に行わなければなりませんし、昆虫や水生植物の調査も続けなければなりません。私たちおっ鳥クラブも野鳥飛来や繁殖の観察を継続しなければなりません。反面それが楽しみで作業参加しているのです。四季折々作業に参加し、鳥の観察をしながら環境の変化と棲息鳥の変化を捕らえられれば楽しさも一層のものとなります。それはオオムラサキの会、植物観察会、ウォーターリフォームの会、ホテルの会も同じようにそれぞれの分野で観察し、楽しむことになると思います。また、一般町民もこの里山を通じて農業の持つ多機能性を理解し、人と自然がかかわり合い動植物が多様に生きるさまを楽しみ、子どもたちが川に入り、捕虫網を振

り回し走り回る姿を夢見ながらこれからも頑張ってください。北海道野鳥愛護会の皆様も栗山の里山計画をお訪ね下さい。4月から10月まで毎月第2日曜日が奉仕作業となっております。



ハサンベツ里山構想図

なおこの文章作成にあたり2002年版「いきものの里のなかまたち」を参考にし、里山計画実行委員会事務局局長高橋慎さんにご協力いただきました。

〒069-1512 栗山町松風4丁目20-2

## 野鳥情報と新聞報道 —カササギを例として—

樋口孝城

野鳥に興味を持っている人であれば、新聞を開いて野鳥関係記事が載っていたら、何はともあれ、まず目を通すという場合が多いであろう。季節の話題としてハクチョウの飛来のことなど、社会生活の話題としてカラスがゴミをあさったり、人を襲ったりすることなどが出てくるが、ときには希な鳥の飛来などの貴重な記録も掲載され、その中には将来的に形を変えて学術的な発表につながるものもある。そこまでには至らなくても、扱い方次第によっては野鳥記録のデータベースとして十分な価値を含むものも数多くある。

ここでは北海道のカササギに関する報道を例として、野鳥情報と新聞報道という観点から、いくばくかの私見を書かせていただく。近年、室蘭や苫小牧などで繁殖し、他地域でも散見されているカササギは、そもそも佐賀平野を中心とした北九州に留鳥として棲むものである。そのカササギが北海道で見られること自体、ある程度話題性があり、新聞記事として取り上げられるのは決して特別なことではないであろう。

新聞報道といっても、広い北海道をほぼくまなくカバーできるのは地元紙である北海道新聞（道新）であり、道新記事については現在のところ、インターネット上で全道版と地方版を含めておよそ16年前の1987年7月まで遡って記事検索が可能（有料）である。他の新聞でも検索可能なものはあるが、今回は道新記事に限ったものであることをおことわりしておく。なお、道新によると、1987年からのデータ蓄積を始めたが、現在でもまだデータベース構築中であるため、新聞にはあるがデータベースには無いものもあり得るとのことである。

キーワードを「野鳥」とすると検索結果は1年分だけでも数百件になる。それを全部チェックするのはたいへんなので、「カササギ」として検索すると1987年7月から2003年7月までの約16年間で15件に過ぎず、極めて簡単になる。記事中に「カササギ」という語が1つでもある記事はすべてピックアップされるので、この15件がすべてとなる。以下に、記録とは直接関わらない1件を除いた14件を、要点を簡単に加えながら年代順に列挙する。

- (1) 1992年10月22日 朝刊  
「カササギ2羽、本道を迷走中—室蘭市内で確認」  
前日21日に室蘭市輪西町の住宅街で2羽が撮影された。
- (2) 1993年2月6日 朝刊  
「強風で難航のカササギ巣作り応援・・・」  
同年1月から新日鉄室蘭製鉄所構内の鉄塔で巣作りを試みている。鉄塔に枝を組む“巣作り援助作戦”を行った。
- (3) 1993年4月22日 朝刊  
「カササギの巣撤去—室蘭の鉄塔・・・」  
同年2月6日に紹介された記事の続編。巣作りによる送電線への事故可能性を考慮し、巣を撤去した。
- (4) 1994年5月4日 朝刊道央  
「昨年は鉄塔に・・・、再び営巣・・・」  
昨年1993年のつがいが同製鉄所近くの雑木林で営巣し、抱卵中。
- (5) 1998年4月25日 夕刊  
「カササギ営巣 苫小牧の住宅地」  
苫小牧市勇弘の住宅街の電柱上部に営巣しているのが確認された。
- (6) 1998年10月13日 朝刊地方  
「おやっ、北九州の鳥が・・・、松前にカササギ飛来」  
松前町（渡島管内）中心部の電柱に8月下旬の連日姿を見せている。
- (7) 1999年5月21日 朝刊地方  
「無事に産卵してね 室蘭」  
室蘭市東町の北電送電線鉄塔に野鳥のつがいが巣を作り、その野鳥は大きさ、姿、色合いなどから「カササギに似ている」。
- (8) 1999年6月16日 朝刊地方  
「公園、電柱 子育て順調、カササギ続々巣立ち」  
苫小牧勇弘の電柱の上や携帯電話のアンテナ施設など2ヶ所で営巣、ヒナが続々巣立っている。
- (9) 2000年2月9日 夕刊地方  
「浦幌は野鳥の楽園・・・」  
浦幌町（十勝管内）の浦幌野鳥倶楽部が町内で過去10年間に確認した263種の中にカササギが含まれている。（筆者注）同倶楽部によって作成された浦幌鳥類目録では、1994年1月29日～2月1日に浜厚内市街で1羽観察されたことになっている。
- (10) 2000年8月24日 朝刊地方  
「カササギ親子 登別でパチリ」  
同年7月11日に登別市内で親子と思われる2羽が撮影された。
- (11) 2001年4月1日 朝刊地方  
「カササギとらえた 大成・・・」  
同年3月23日に大成町（檜山管内）都地区の住宅街で撮影された。
- (12) 2001年5月12日 朝刊全道  
「カササギ 苫小牧で繁殖 勇弘中心に20羽」  
カササギがここ数年、苫小牧市で着実に数を増やし、勇弘地区を中心に20羽近くいる。



## (13) 2002年3月9日 夕刊地方

「カササギ飛来 大野の雑木林で撮影」

同年2月6日に大野町(渡島管内)細入の雑木林で撮影された。

## (14) 2002年8月22日 朝刊地方

「いたいた!カササギ 栗山町・・・」

同年8月16日に栗山町(空知管内)継立中裏の田んぼ周辺の電線上にいる4羽が撮影された。

ちなみに、朝日新聞データベースで、「カササギ」と「北海道」で検索した結果得られたのは1998年3月27日夕刊の1件のみで、内容は上記の(5)に相当するものであった。

以上、いずれも写真がついているとともに、識別が比較的容易な鳥であることから、カササギであること自体には問題はないと考えられる。年月日、場所、発見者(写真撮影者)、簡単ではあるが状況、専門家などによる多少のコメントなどが書かれているものがほとんどであり、十分とはいえないが、ある程度の記録性は満たしている。

さて、ここでは北海道のカササギ分布自体を紹介するつもりはないので、他に発表された記録については、井上公雄氏(現愛護会副会長)が1990年に「野鳥だより」第82号に書かれたカササギ記録のみを参考のために以下の①~⑪にあげ、若干の考察を述べさせていただく。

- ① 1983年11月 函館
- ② 1983年12月 室蘭市地球岬付近
- ③ 1984年1月3日 室蘭市みゆき町(同年同月21日、写真撮影)
- ④ 1984年3月4日、18日 室蘭市測量山、つがいと思われる2羽
- ⑤ 1984年(?) 室蘭市チマイベツ浄水場付近
- ⑥ 1986年10月 高速道路苫小牧西インター付近
- ⑦ 1988年1月27日 稚内市声問
- ⑧ 1988年10月 稚内市声問大沼
- ⑨ 1989年3~6月 稚内市声問とその海岸
- ⑩ 1990年5~7月 同上
- ⑪ 1990年5月3、4日 天売島

これらのうち、①~⑥は道新記事データベース掲載よりも前のものであり、中には記事になったものもあるかもしれない。参考までに、北海道鳥類目録改訂2版(藤巻、2000)のカササギのところには、室蘭、営業(北海道新聞1984.1.25)という記載があるが、これもデータベース掲載よりも前のものなので、実際の記事については別手段により入手しなければならない。

⑦~⑪は稚内市および天売島の記録であり、データベースとなる1987年以後のものである。しかしながら、それらにつながるものは、少なくとも道新には報道はされていない。この点に新聞報道の特徴がうかがわれる。すなわち、この類いの記事が新聞報道されるためには、それを新聞社

に知らせる人がその地域に存在しなければならないとともに、新聞社のその地域担当者に、そのような記事を集めようとする姿勢がなければならない。このことと関係することとして、初めにあげた14件の記事について、「自分は長年道新を講読しているけれども、そのうちの1つか2つしか見たことがない」という人が大部分であろうことがあげられる。なぜなら、これらの記事の多くは「地方版」に掲載されたものだからである。その地方に情報を積極的に新聞社に知らせる人がいるかないかによって、たとえ同じようなことがあっても、新聞記事という形を見る限りにおいては大きな地域差が生じる。また、読者の立場からみても違う意味での地域差が生じることになる。「地方版」はかなり細分化されており、たとえ隣の市町村での出来事でも、自分が住んでいるところの版には載っていないということはよくあることである。記事自体の地域差はやむを得ないことであり、それらについてはデータベースをこまめに検索することにより、ある程度は解決されるであろう。

広い北海道ではあるが、近年は野鳥観察に何らかの形で関わる人たちが各地に多数おられる。希少な鳥、動向が注目される鳥などについては、できるだけみんなが情報を共有し、それらの鳥の過去と現在を知り、将来を考えていかなければならないであろう。新聞の野鳥関係記事については、たとえば全道版に載るべきものが地方版で終わってしまったり、内容に明らかな間違いや疑念があったりする場合もあるが、北海道の野鳥社会を知るための手段の一つとしては決して小さくない役割を持つであろう。合わせて、全く個人的なものではあるが、連日のように新聞の片隅にでも野鳥関係記事が掲載されるならば、毎日が心楽しいものになるだろうと思っている。

学術的な観点からは、たとえ全国紙であっても新聞記事それ自体は資料価値が低いとみなされている。いろいろな理由があげられるが、学術雑誌的なものと新聞記事とは全く別物と考えるべきであろう。しかしながら、たとえば今回例にあげたカササギについても、もし全道的な過去、現在の状況をとりまとめて学術的なものに仕立てるための一次資料としては、新聞記事はかなり有用なものである。現代はインターネット上のホームページなどを通じた情報発信が盛んであるが、将来に渡ってその情報が保存されるためには、やはり印刷物や半公共的な電子データとして残される必要がある。なお、とりわけ重要な野鳥記録などについては、たとえ新聞記事として掲載されたとしても、それだけで終わらせては結局は日の目を見ないままに埋もれてしまう可能性があり、しかるべき学術雑誌などに発表することが強く望まれる。

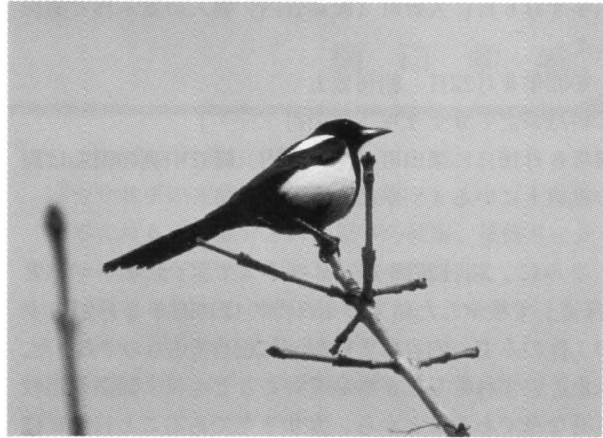
新聞報道を通じて、また、手前みそではあるが「野鳥だより」を通じて、できるだけ多くの人たちが、北海道の野鳥社会をより一層楽しむことができることを願っている。

〒002-8065 札幌市北区拓北5条2丁目10-17

## 江別市にもカササギ飛来

愛護会会員の山田良造さんから江別市で目撃されたカササギの写真が寄せられました。2003年4月11日、午前8時45分頃、江別市元野幌の麻別川橋付近の農家の裏の木に2羽がとまっていたが、写真を3枚撮ったところでカラスに追われてしまい、江別三番通り方向に飛び去ってしまったとのことでした。

この号でもカササギの記録が一部紹介されましたが、これまでに北海道では渡島、松山、胆振、空知、十勝、留萌、宗谷の各支庁管内で確認されています。今回、石狩支庁管内でも確認され、徐々に北海道全域に生息分布を広げていると思われます。(広報部)



2003.4.11 山田良造氏撮影

## 鳥獣保護員制度について

北海道環境生活部環境室 自然環境課長 村井公裕

鳥獣保護員は「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律(平成14年法律88号、旧鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律(大正7年法律第32号)を全面改正)」に規定されている制度です。同法では鳥獣保護行政を計画的に推進するために都道府県知事は鳥獣保護事業計画を定めることとされています。鳥獣保護事業とは、野生鳥獣とその生息環境が一体となった適正な保護管理を図るため、野生鳥獣の生息実態の把握に努め、これらの科学的な情報に基づき、鳥獣保護区等の設定、適正な狩猟の管理、希少種の保護、移入種の排除等、総合的、計画的な取り組みをするものです。

野生鳥獣の生息地は山野湖沼等広範な地域ですが、これら広い地域において鳥獣保護のための監視や巡視指導を都道府県の担当職員のみで行うことは困難です、昭和38年には旧法が改正され、鳥獣保護員を置くことができるとされました。道においては、鳥獣保護事業計画の実施体制の整備に関する事項で鳥獣保護員の配置を盛り込み、任命しています。任命期間は毎年4月1日から翌年3月31日までで、14支庁に合計207名を配置し、これに加えて北海道自然環境保全条例による自然保護監視員との兼務者として19名を配置しております。

鳥獣保護員の選任に当たっては、業務担当地域の市町村内に居住している者、鳥獣や狩猟に関し相当な知識を有し

鳥獣保護事業に熱意を有している者、地元住民の信望があり時間的また経済的な制約の少ない者などに該当する方を基本としており、地元市町村から情報提供をいただきながら選任しています。

従事日数は、鳥獣保護区の面積や箇所数、地域の実情、季節による巡視日数の変動などありますが、一人月平均2日から8日、年間40日から65日となっています。

事業内容は、鳥獣保護区や休猟区などの管理、狩猟の取締り、狩猟者の指導、鳥獣保護思想の普及啓発、鳥獣に関する諸調査等です。

巡視した結果については毎月、管轄支庁に報告することにしており、巡視中に法令に違反する行為等を発見したときは当該行為を中止するよう指導等を行い、速やかに管轄支庁に通報することとしています。報告を受けた支庁は、その内容の緊急性などを判断し、適切な処理をするとともに、必要に応じて関係機関などに情報提供をしています。

なお、従事に際しては、常に身分証明書及び鳥獣保護員手帳を提示するとともに、真摯に対応するよう指導しています。

野生鳥獣の保護については、難しい課題も多く多様な対応が求められておりますが、今後とも、鳥獣保護員の方々がより一層活躍できるよう努めたいと考えています。

# 道内における「市町村の鳥」の指定状況について

広 報 部

道内の市町村においては昭和40年代以降それぞれのマチのシンボルとなる木や花と並んで鳥を指定する動きが見られます。身近な自然に関心を向けるきっかけになることで、すから、大変好ましいことと思います。これまでに鳥の指定を行った市町村を鳥の種類別に整理してみると表のようになり、68市町村で69件の指定が行われています。木や花についてはほとんどの市町村で指定がなされているのに対して、鳥については212市町村中の68ですから、指定率としては32%となります。支庁管内別に見ますと、指定率が高いのは十勝管内で、20市町村中15市町村で指定されています。逆に少ないのは日高管内で、9町村とも鳥については指定されていません。このような差は、野鳥に対する住民の関心の度合いの違いからくるのでしょうか。

さて、指定を受けた鳥の種類に注目してみましょう。指

道内における「市町村の鳥」の指定状況

種 名	市 町 村 名	市町村数
アオサギ	浦幌町	1
マガン	美唄市	1
ハクチョウ類	苫小牧市・根室市・弟子屈町・別海町(ハクチョウ)、 小清水町・幕別町(オオハクチョウ)、 浜頓別町(コハクチョウ)	7
オジロワシ	斜里町・羅臼町	2
エゾライチョウ	新得町・足寄町	2
キジ	千歳市・八雲町(コウライキジ)	2
タンチョウ	鶴居村	1
カモメ類	浜益村(ごめ)、戸井町・砂原町・瀬棚町・寿都町・ 余市町・増毛町・枝幸町・広尾町(カモメ)、 厚岸町(オオセグロカモメ)	10
エトビリカ	浜中町	1
ハト	岩見沢市	1
アオバト	小樽市	1
カッコウ	札幌市・深川市・北檜山町・長沼町・雄武町、 土幌町、上土幌町、鹿追町、芽室町、陸別町	10
フクロウ	当別町、釧路町	2
ヤマセミ	千歳市	1
カワセミ	恵庭市	1
クマゲラ	富良野市、置戸町	2
アカゲラ	名寄町、ニセコ町、仁木町、幌加内町、本別町	5
ヒバリ	帯広市、東神楽町、中札内村、大樹町	4
セキレイ類	三笠市(ハクセキレイ)、歌登町(セキレイ)	2
キレンジャク	旭川市	1
コマドリ	礼文町、利尻町、利尻富士町	3
ウグイス	歌志内市、厚真町、清水町	3
オオルリ	南茅部町	1
コガラ	天塩町	1
ヒガラ	室蘭市	1
ヤマガラ	函館市、赤平市	2
シジュウカラ	芦別市	1
合 計	68市町村(千歳市は2種指定)	69

(北海道市町村振興協会『市町村の組織と運営の概要2002』による)

定の際には広く住民に対してアンケート調査などが実施されているようですので、特に鳥好きというわけでもない、一般の住民の方がどのような鳥をわがマチのシンボルとしてふさわしいと考えているのかが分かり、大変興味深いものがあります。夏鳥、冬鳥といった分類で見ると、夏鳥と留鳥が多く、冬鳥や旅鳥は少数です。シギ・チドリ類は一般にはなじみのない鳥ですから指定がないのは当然のように思いますが、カモ類がまったくないのは少し意外な感じがします。

指定市町村が一番多いのはカモメ類とカッコウです。「カモメ」というのは、いわゆる「ただカモメ(学名*Larus canus*)」という特定の種を指しているのではなく、ウミネコやオオセグロカモメなどのカモメ類を総称しているものと考えられます。バードウォッチャーにとってカモメ類

はありふれた鳥ともいえますので、指定しているマチが多いことは多少意外な感を受けるかも知れません。これらのマチは当然ながら海に面したマチであるとともに、沿岸漁業が基幹的な産業であるマチが多いように見受けられます。なかにし礼作詞の「石狩挽歌」は、「海猫(ごめ)が鳴くからニシンが来ると 赤い筒袖(つっぱ)のやん衆がさわぐ〜」と始まりますが、魚群探知機が発達した今日ではともかく、かつてはカモメの群れが魚群の所在を知らせてくれるということがあったのでしょうか。カモメ類は、ともに沿岸に生きる生き物として共感をもって好ましく思われていることが伺われます。なお、浜益村は「ごめ」として指定していますが、「ごめ」はカモメ類の地方的な俗称です。地域の方がカモメ類に深い愛着を感じていて、それを普段着のまま表現しているような印象があって、まことに面白いと思います。

カモメと並んで多いのがカッコウですが、指定している市町村を見ると、農地帯が多いことが分かります。本州の各地には昔から「カッコウが鳴くから大豆をまけ」というようなことわざとか、言い習わしのようなものがあって、カッコウの鳴き声は種まき作業の目安として

親しまれてきたそうです。この言い習わしは、北海道に入った開拓移民や屯田兵によって各地で語り継がれているようですが、明治の初年開拓移民たちは「蝦夷地」でも故郷と同じようにカッコウの鳴き声が聞こえることに感激しただろうと想像されます。こうして見ると、マチの鳥として指定された鳥は地域の産業や人々の生活と深く結びついているようです。

ハクチョウ類もこれらに次いで指定市町村が多い部類に入ります。よく目立つ鳥ですし、春や冬の訪れを知らせてくれる旅鳥として道内各地で親しまれています。このほか指定鳥を見ていくと、一般の住民に親しまれているとはいえないけれども、地域の自然的な特異性を象徴しているようなものが見受けられます。美瑛市のマガン、斜里町・羅臼町のオジロワシ、浜中町のエトピリカ、小樽市のアオバトなどです。これらの鳥が指定されるには一部の住民の方

の熱意があったでしょうし、それを選定した行政当局者の見識のようなものが伺われるように思います。

現在全国の市町村においては市町村合併が議論されています。合併が成立するとこういった鳥などの指定はどうなるのでしょうか。たとえば、A町とB町が合併して新しくC市が誕生するような場合は、A・B両町の指定は消滅し、新たに指定しなければならないことになり、また、D市がE町を吸収合併する場合は、D市の指定はそのまま生き、E町の指定は効力を失うというようなことになるそうです。合併が進むと地域性豊かな鳥の指定が消えてしまうケースが増えるかも知れません。将来合併論議が一段落した段階で、木や花、そして鳥についても新たな指定に向けた議論や運動が活発化することを期待したいものです。

なお、北海道の鳥はタンチョウで、道民による投票に基づいて昭和39年に指定されています。



### 野幌森林公園探鳥会

2003. 7. 13

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、コルリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、ハシボソガラス 以上 25種

【参加者】赤沼礼子、今村三枝子、氏家正毅、太田清美、岡田幹夫、川村宣子、河端、後藤義民、小西美美枝、今善三郎、斉藤正雄、笹森明子、沢田浩一、鈴木英雄、鈴木比沙子、瀬賀勝人・弘子、高橋利道、徳田恵美・和美、戸津高保、原 冴子、原 美保、畑 正輔、辺見敦子、松原寛直・敏子、村上トヨ、山口和夫、山本昌子、山本和昭、雪田昭治、雪田久子、吉田慶子 以上 34名

【担当幹事】岡田幹夫、戸津高保

### 鶴川河口探鳥会

2003. 8. 24

【記録された鳥】ウミウ、ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ハヤブサ、マガモ、カルガモ、アオアシシギ、イソシギ、アカエリヒレアシシギ、オオジシギ、オバシギ、トウネン、ハマシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、

キセキレイ、ハクセキレイ、ノビタキ、ホオアカ、オオジュリン、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 34種

【参加者】板田孝弘、氏家正毅、大荒田忠良、岡田幹夫、荻野裕子、小山内恵子、蒲澤鉄太郎・則子、門村徳男、岸谷美恵子、小堀煌治、佐々木充人、佐藤幸典、佐藤正彦、品川睦生、島田芳郎・陽子、高栗 勇、高橋良直、田中哲郎、徳田恵美・和美、富樫末治、戸津高保、中川テル子、中正憲・弘子、原 美保、原 芳明、畑 正輔、藤谷節子、松原寛直・敏子、水上砂恵子、村上トヨ、山田良造、山本和昭、山本昌子、鷺田善幸 以上 39名

【担当幹事】佐藤幸典、岡田幹夫

### 鶴川河口での探鳥会に参加して

2003. 9. 7 大倉寿之

私はWWFジャパンで、「シギ・チドリの教育プログラム」を日本野鳥の会のレンジャーと協力して開発し、現在国内で普及させる試みをしているところです。9月6日に鶴川河口干潟にて、本教育プログラムに関する研修会を学校の先生方や教育委員会の方、役場の職員の方、ネイチャー研究会 in むかわの方々などを対象に開催しました。翌日に今回の探鳥会が企画されていて、ありがたくも誘っていただき、参加した次第です。

WWFジャパンのオフィスは東京タワーの近くに位置しており、窓の外を眺めると目に飛び込むのは首都高速道路の車列ばかりなので、シギ・チドリを見るために、千葉県習志野市の谷津干潟へよく通います。今回、鶴川河口で見ることができたシギ・チドリは、アオアシシギ、ソリハシシギ、トウネン、ハマシギ、メダイチドリなど谷津干潟でもおなじみの鳥たちでした。

今年の夏は東京でも冷夏だったので、北海道でも9月の上旬であればそれほど気温差はないだろうと高を括っていたのは大はずれで、海から吹きつける潮風はとて冷たく、体感温度は初冬の東京のようでした。寒さに凍えながら鳥たちを見ていたのですが、シギ・チドリたちは寒さなどまるで気にかける様子もなく、ゴカイをせっせとつまんで食べていました。そのたくましさに言葉を失い、ひたすら望遠鏡をのぞき込む私でした。

この鶴川河口では人工干潟の保全・再生事業が行われています。海岸浸食により、かつての干潟が大きく失われたためです。9月6日の研修会では「食物ピラミッド」の土台に位置するプランクトンや有機物を顕微鏡によって観察することができ、また、干潟に入ってこれらを食べて生きるゴカイを掘り出すことができました。そしてゴカイを食べるシギ・チドリたちを双眼鏡を通して観察していると、ハヤブサが現れてアオアシシギを追いかける光景まで展開されて、干潟の生態系がみな頭の頭に見事に描かれました。何と協力的な生き物たちでしょう！

鳥類や干潟の生き物たちのためにこれからもよい干潟環境を守り、育てていきたいものです。

〒105-0014 東京都港区芝3-1-14 日本生命赤羽橋ビル6F  
(財)世界自然保護基金ジャパン内

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、ミサゴ、チュウヒ、オオタカ、ノスリ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、クロガモ、メダイチドリ、アオアシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、コオバシギ、トウネン、ハマシギ、エリマキシギ、ミヤコドリ、ウミネコ、オオセグロカモメ、アジサシ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 36種

【参加者】石田典也、岩崎孝博、氏家正毅、大倉寿之、太田清美、萩野裕子、小山内恵子、片山 實・慶子、川東保憲、北山政人、佐藤幸典、齋藤美和子、佐藤正秀、品川睦生、芝原達也、島田芳郎・陽子、高橋良直、登野泰信、富川 徹、中正憲信、樋口孝城、松島雅之、柳田弘子、柳田和美、若林秀男、若林ちづ子、鷺田善幸 以上 29名

【担当幹事】樋口孝城、富川 徹

### 野幌森林公園探鳥会

2003. 9. 14

【記録された鳥】アオサギ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、メジロ、アオジ、カケス

以上 13種

【参加者】朝倉佳文、井上公雄、川村宣子、小西美美枝、今 善三郎、後藤義民、品川睦生、高栗 勇、佐々木 裕、

戸津高保、長尾由美子、広木朋子、松原寛直・敏子、山口和夫、山川美香、吉田慶子 以上 17名

【担当幹事】井上公雄

### 野幌森林公園探鳥会

2003. 10. 5

【記録された鳥】オオタカ、コゲラ、アカゲラ、クマガラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ウグイス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カケス、ハシブトガラス 以上 19種

【参加者】赤沼礼子、今村三枝子、氏家正毅、大賀 浩、岡田幹夫、後藤義民、小西美美枝、小山久一、齊藤正雄、齋藤美和子、原 美保、二川敏幸、辺見敦子、堀 さち子、中正憲信、浪田良三、矢島慶子、安 真一郎、山本和昭、山本昌子、松原寛直、島田芳郎・陽子、品川睦生、四垂、清水朋子、関根恵美子、富川 徹、富永まさえ、畑 正輔、土生 (はぶ) 志織 以上 31名

【担当幹事】富川 徹

### 宮島沼探鳥会

2003. 10. 12 戸津高保

久しぶりの宮島沼探鳥会です。沼につくと、1万羽近いマガンが次々と沼から出て行ったり、もどってきたりしています。何度見ても、マガンが編隊を組んで飛ぶ姿はいいものです。マガンの周囲にキンクロハジロ、ミコアイサ、ミミカイツブリなどのカモ類やカイツブリ類が見られます。カモ類は、まだエクリプスでわかりづらい感じでした。

マガンの群れの中に、ハクガン、シジュウカラガン、カリガネなどが入っていました。探鳥会ですから、たくさんの目があり、誰かが、こういった鳥を見つけます。沼のほとりにオオハシシギやツルシギも見られました。

個人で来ていたら、おそらく見つけられないでしょう。



キンクロハジロ

オジロワシが飛んだり、木に止ったり。チュウヒが飛びました。妙に白く見えて、一見何だろうと思ったのですがチュウヒでした。オオタカも現われ、ワシ・タカ好きの私としては満足でした。

沼のほとりの草むらでベニマシコが鳴きます。私は確認しなかったのですが、カシラダカも出たそうです。そろそろ冬鳥も現われる季節なのですね。

普段はなかなか会えない鳥仲間と会って話したり、気持ちの良い探鳥会でした。

〒062-0911 札幌市豊平区旭町4-1-14

【記録された鳥】カイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、オオタカ、シジュウカラガン、マガン、カリガネ、ハクガン、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、オグロシギ、ツルシギ、オオハシシギ、アカゲラ、ヒバリ、シジュウカラ、カシラダカ、アオジ、オオジュリン、ベニマシコ、シメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ウsp.

以上 35種

【参加者】板田孝弘、岩崎孝博、氏家正毅、岡田幹夫、川東保憲・知子、菅野のみ子、菊池佐和子、岸谷美恵子、後藤義民、小西美美枝、佐藤ひろみ、品川睦生、島田芳郎・陽子、白澤昌彦・留美子、白田 築、鈴木正之、関口健一、高橋、高橋良直、高栗 勇、立田節子、徳田和美・恵美、戸津高保、中正憲信、浪田良三・典子、松島雅之、松原寛直・敏子、宗田和江、山本和昭、吉田慶子、畑 正輔、原芳明、原 美保、樋口孝城、鷺田善幸 以上 41名

【担当幹事】佐藤ひろみ、岡田幹夫

### 野幌森林公園探鳥会

2003.10.19

【記録された鳥】トビ、オオタカ、ノスリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ルリビタキ、ウグイス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アオジ、カケス

以上 18種

【参加者】赤沼礼子、今村三枝子、内田 孝、小川聖江、後藤義民、齊藤正雄、高嶋則子、高橋良直、戸津高保・以知子、野坂英三、松原寛直・敏子、村田静穂、山口和夫、横山加奈子、米倉寛治・セツ子 以上 18名

【担当幹事】村田静穂、戸津高保

### 野幌森林公園探鳥会

2003.11.2

【記録された鳥】トビ、オオタカ、ノスリ、コゲラ、アカ

ゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、カケス、ハシブトガラス

以上 18種



野幌森林公園 探鳥会風景 2003.11.2

【参加者】赤沼礼子、犬飼 弘、今村三枝子、岩崎孝博、氏家正毅、大賀 浩、岡田幹夫、蒲澤鉄太郎、川村宣子、栗林宏三、久志本アイ、小山久一、後藤義民、齊藤正雄、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋利道、高橋良直、徳田恵美、戸津高保、野坂英三、原 美保、畑 正輔、樋口孝城、堀 さち子、松原寛直・敏子、村井章夫、山口和夫、山本和昭、吉田慶子 以上 32名

【担当幹事】栗林宏三

### 思いでのウトナイ湖

2003.11.9 岡田 幹 夫

秋の終わりの季節にしては穏やかな日中に恵まれた探鳥会でしたが、まだガンたちが見れるウトナイ湖畔には40名ほどの参加者が集まりました。湖畔ではいつものように水鳥たちにエサをやる観光客の人達が群れていましたが、愛護会がウトナイで探鳥会を開催するようになった昭和51年頃からのなじみの風景のように思われます。その当時はバス利用が普通で、バス停は「ウトナイ遊園地前」であったと思います。私が初めてウトナイ湖を見たのは、この湖の北側から美々川がウトナイ湖にそそぐ「植苗・ウトナイ」ルートからでした。草原性の野鳥を教えてもらった初めての探鳥会は、札幌に転勤になった年の昭和47年6月でした。それ以来、何十回も来たウトナイ湖ですが、鳥たちを通して自然の仕組みなどを教えられたなつかしい探鳥地です。

探鳥開始後まもなく、湖岸のコブハクチョウの横にコクガンが見られ、楽しませてくれました。函館湾で20数年前に双眼鏡で10数羽のコクガンを見たのが最初で、アオサや海藻などを餌としていると聞いていたので、海でもないウ

トナイ湖に飛んで来たのはどうしてなのかと言わずにはいられなかった。ウトナイ湖ではたぶん初めての珍客のように思います。

さらに、湖岸でエサをもらっているオオハクチョウやオナガガモに紛れてヒシクイ3羽を見たという驚きよりもそんなに人慣れしているのかという疑問を持ってしまいました。昭和46年頃までは狩猟鳥であったガン類はハンターに狙われる鳥であったし、渡来数も少なかったが、保護鳥になってからも警戒心が強く遥か遠くでないと姿を見ることができなかった。ガン類を見るには道東に行かなければ見られないと言われ、十勝の湧洞沼にでかけて遠くにヒシクイの姿を見て感激をしたのは昭和52年の霜の降る頃であったし、春浅い雪の残る美唄の水田にマガンが来ていると聞いて、薄暗い西空の彼方から彼等の鳴き声を聴いて、その声をたよりに追いかけて降りている姿を見たのも昭和54、5年頃だったと思うと、最近の宮島沼の春秋の渡りの状況は信じられないような気持ちになります。ウトナイ湖は早くから鳥獣保護区に指定され古くから渡り鳥たちにとって重要な湖沼であったが、少数のマガンやヒシクイが記録されるようになったのは昭和56、7年頃からですから、この日のヒシクイのような警戒の少ない状態は、近くで観察できて嬉しいのですが、それが彼等にとって決して良い筈はないと感じました。

ウトナイ湖サンクチュアリネイチャーセンターで昼食をとり、鳥合わせしたところハイロチュウヒも記録(昭和45年の春の探鳥会記録以来の記録)され、参加者とともに記憶に残る1日だったと思いました。

〒004-0002 札幌市厚別区厚別東2条5丁目3-5

【記録された鳥】 ダイサギ、アオサギ、トビ、ハイロチュウ

ウビ、オジロワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、コクガン、ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、ウミアイサ、カワアイサ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、キバシリ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 36種

【参加者】 赤沼礼子、板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、氏家正毅、大荒田忠良、岡田幹夫、加藤文夫、加藤千春、蒲澤鉄太郎・則子、菊池佐和子、菊池、北山政人、小西美美枝、小堀煌治、佐藤幸典、島田芳郎・陽子、清水朋子、品川睦生、鈴木幸弥、鈴木耀介、鈴木順子、高栗 勇、高橋きよ子、高橋良直、徳田恵美、戸津高保、畑 正輔、広木朋子、堀 さち子、松原寛直・敏子、三浦とも子、山口和夫、山田良造、山本和昭、横山加奈子、鷺田善幸、渡辺 以上 41名

【担当幹事】 北山政人、佐藤幸典



ミコアイサ



【小樽港】 2004年1月18日(日)

小樽港周辺で見られる海ガモ類などを観察する、野鳥の会小樽支部と合同の探鳥会です。アカエリカイツブリ、ホオジロガモ、スズガモ、ウミスズメなどのほか、カモメ類や猛きん類も良く観察されます。日和山燈台付近、祝津漁港、小樽埠頭などの各観察ポイントを貸切りバスで移動しながらの探鳥会です。

なおバスを利用しますので申込制となります。

集 合=午前9時30分 JR小樽駅待合室

申込先=白澤昌彦宅 011-563-5158

午後6時~8時までお願いします。

締切り=1月11日(日)まで

参加費=1,000円程度の予定です。当日受付時にお納めください。

【野幌森林公園】 2004年2月1日(日)

冬の最も厳しい季節の中でカラ類、キツキ類などの留鳥が活動しています。冬鳥として渡ってきたレンジャク、アトリ、マヒワなどと共に、クマガラやフクロウも見られるかもしれません。

集 合=午前9時 大沢口駐車場入口

交 通=夕鉄バス(文教台線)新札幌バスターミナル発  
「文教台西行き」大沢公園下車 徒歩5分

【円山公園】 2004年2月29日(日)

陽ざしに春が感じられる季節です。ツグミ、ウソ、アトリなどの冬鳥と共に、キツキ類やカラ類が見られるでしょう。午前中で解散する予定です。

集 合=午前9時 円山公園管理事務所前

交 通=地下鉄東西線 円山公園下車 徒歩3分

【ウトナイ湖】 2004年3月21日(日)

本州などで冬を過ごしたガン・カモ・ハクチョウ類が、この時期群れをなして北の繁殖地を目指し渡りはじめます。ウトナイ湖はこれらの渡りの中継地となっています。この他はオオワシやオジロワシなども観察されます。

集合=午前9時30分 鳥獣保護センター前駐車場  
交通=道南バス ウトナイレイクランド下車  
☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ち下さい。  
☆何れの探鳥会も余程の悪天候でない限り行きます。  
☆探鳥会の問い合わせは、

011-563-5158 白澤さん宅

# 鳥民だより

## ☆☆☆ 会員名簿 ☆☆☆

### 【新しく会員になられた方】

- 猿子 正彦 〒005-0831  
札幌市南区中ノ沢1-2-16
  - 本間 久雄 〒069-0805  
江別市元野幌769-13
  - 氏家 正毅 〒063-0038  
札幌市西区西野8条2丁目12-20-106
  - 辺見 敦子 〒069-0854  
江別市大麻中町2-29 ロックパディ302
  - 水上砂恵子 〒003-0024  
札幌市白石区本郷通り7丁目南1-27-202
  - 太田 清美 〒006-0022  
札幌市手稲区手稲本町2-3-4-15-903
  - 加藤 千春 〒005-0824  
札幌市南区南沢4条3丁目3-50
  - 堀川 恵子 〒061-1136  
北広島市松葉町6-2 K801
  - 前田 敬 〒062-0933  
札幌市豊平区平岸3条2丁目5-11-101
  - 松島 雅之 〒053-0022  
苫小牧市表町7-5-6 メゾンド・グレース305
  - 桑木 功 661-0035  
兵庫県尼崎市武庫之荘5丁目24-31
- 家族会員～個人会員に変更  
大高 隆 ～ 洋平

### ◇新年講演会のご案内

- ・日時：平成16年1月10日(土) 13:00～16:00
- ・場所：札幌エルプラザ内  
札幌市男女共同参画センター 4階大研修室  
札幌市北区北8条西3丁目
- ・講師：菊地政光氏  
厚沢部クマゲラ研究会会長、山階鳥類研究所標識調査員、自然観察指導員など鳥類関係団体で活躍中です。現在、かんばの宿大沼に勤務されています。
- ・演題：渡島半島の鳥たち  
大沼周辺で営巣しているアカショウビンやクマゲラ、冬季の砂原海岸のシロハヤブサを含め、渡島半島の鳥たちが紹介されます。また、クマゲラ研究会では100年先のため山林を購入し、毎年植林をしているのですが、菊地氏個人でも購入・植林をされており、それらについてもお話いただく予定です。
- ・スライド映写  
皆さんの持ち寄ったスライドを映写します。たくさんの作品の参加をお待ちしています。
- ・会費 500円

### 講演会場案内図



(お越しの際は公共交通機関をご利用ください)

- ・交通機関
  - JR札幌駅北口より徒歩3分
  - 地下鉄南北線札幌駅より徒歩7分  
(公共地下歩道で札幌駅12番出口から建物内まで直通)

### ◇写真展の作品を募集します

平成16年度も野鳥写真展を開催します。場所は光映堂フォトギャラリー(札幌市中央区大通西3丁目)で、5月の予定です。詳細は次号でお知らせします。